

# 鹿大教職組ニュース

Tel. 099-285-7285, Fax:099-285-7286, e-mail. ka-kumiai@leaf.ocn.ne.jp

鹿大新執行部との顔合わせおよび 2018 年度第 2 回・2019 年度第 1 回団体交渉報告…1	
組合などの協力で樹木 14 本の保護を実現！……………1-3	
全大教九州第 16 回教研交流集会に参加して……………3-6	
令和元年度第二回団体交渉 要求項目募集中！……………6	

## 鹿大新執行部との顔合わせおよび2018年度第2回・2019年度第1回団体交渉報告

教職員組合は2019年7月30日(火) 15:30から約1時間、農学部・共同獣医学部共通棟 3階大会議室において鹿大新執行部と組合新執行部の顔合わせおよび2018年度第2回・2019年度第1回団体交渉を行いました。大学側の新執行部からは佐野学長、越塩理事(総務担当)、西学長補佐(人事担当)が参加し、それ以外に、事務部から総務部長、人事課長、共通教育課長、人事課長代理、任用審査係長、給与計画係長、安全衛生係長などが列席し、私たち組合の新執行部と顔合わせをしました。



顔合わせが10分程度で終了すると、すぐに佐野学長は他の会議に出席するため退席し、団体交渉は主に越塩理事、総務部長、人事課長とのやり取りとなりました。4月25日提出の組合からの要求項目([http://ka-kumiai.jp/dl/negotiation/negotiation\\_\(2018-2\)\\_01.pdf](http://ka-kumiai.jp/dl/negotiation/negotiation_(2018-2)_01.pdf)) および7月25日に受け取った当局からの回答書([http://ka-kumiai.jp/dl/negotiation/negotiation\\_\(2018-2\)\\_02.pdf](http://ka-kumiai.jp/dl/negotiation/negotiation_(2018-2)_02.pdf))については、既に中央執行委員経由および組合ホームページに掲載してお知らせしている通りです。

交渉時間が1時間に限られているため、今回も主に文章で回答を受け取った4項目(団体交渉年2回実施、ハラスメント対策について、「実質化」を名目とした労働強化の懸念、人事凍結の即時解除・雇止めの撤廃)に限定して、交渉を行いました。まずは、ここ数年間、年に1度しか実施できていない団体交渉を必ず夏季と冬季の年2回行うという要望は、あっさり同意を得ることができました。

一方、ハラスメント対策について、「実質化」を名目とした労働強化の懸念、人事凍結の即時解除・雇止めの撤廃という3つの項目については、「ハラスメントチェックシートの提出徹底」、「業務の効率化や省力化へ取り組んでいく」、「人事凍結・雇止めは行っていない、無期化の審査手続きは部局によって異なる」といった回答書の内容の繰り返しで、1時間の話し合いをしても手ごたえのある進展は得られませんでした。私たち組合新執行部の交渉の仕方も、まだ未熟だったと反省しています。次回冬の交渉には、しっかり牙を研ぎあげてあげて、1項目でも多く、私たちの要求を認めさせていきたいと思っています。(文責 書記長 坂巻祥孝)

### 組合などの協力で樹木14本の保護を実現！～稲盛記念館駐車場増設に伴う伐採計画中止の顛末～

2019年10月竣工間近の鹿児島大学稲盛記念館は総合教育研究棟の北側に位置し、人通りの多い高麗本通りに面している。この新しい建物では、本学への来賓に対するレセプションなどにも対応できるように「(株)ティアンドエムフーズ」が運営するレストランが営業する予定となっている。このレストラン利用者のために当初計画では建物東側に10台分の駐車場が整備されることになっていたが、今年に入って20台分の増設を大学が決定した。この増設計画は法文学部

東側に20台分を確保するもので、これに伴って法文学部東側と南側の、クスノキ、アメリカフウ、イチヨウなどの大木14本の伐採が必要になるとされた。この計画について6月19日に法文学部教授会で、突然「報告事項」として発表された。これに対し、多くの意見や異論がメールで執行部へと伝えられたが取り上げられることはなかった。教授会では審議の余地もなかったことから、教職員組合から、大学当局へ質問および要望を提出することとした。要望書 ([http://ka-kumiai.jp/dl/negotiation/Request\\_stop\\_parking\(2019-1\)\\_01.pdf](http://ka-kumiai.jp/dl/negotiation/Request_stop_parking(2019-1)_01.pdf)) では、1) 推定樹齢約70年のクスノキ等の並木伐採の中止要請、2) 新設される駐車場の特に出入り口における安全確保、そして、3) これら駐車場整備計画を大学構成員に事前に丁寧に説明することを求めた。

その後、この問題に対する動きを日付を追ってまとめると以下の通りである。

6月19日：法文学部および理工学研究科教授会で稲盛記念館のための駐車場増設と予定地の樹木伐採工事について「報告事項」として報告される。

6月27日：第1回施設マネジメント委員会で駐車場増設と樹木伐採について審議了承。

6月28日：鹿大教職員組合定期総会後の懇親会で、他学部教員にも駐車場増設と樹木伐採の計画が広まり、「組合」としてこの問題を認識。

7月12日：鹿大教職員組合中央執行委員会から、学長あてに要望書提出を決定。

7月17日：「稲盛記念館で営業するレストランのための駐車場設置の中止を求める要望書」を人事課経由で学長に提出 ([http://ka-kumiai.jp/dl/negotiation/Request\\_stop\\_parking\(2019-1\)\\_01.pdf](http://ka-kumiai.jp/dl/negotiation/Request_stop_parking(2019-1)_01.pdf))。

7月20日：南日本新聞社文化生活部記者の取材を組合が受ける。

7月30・31日：理学部・法文学部有志教員と組合共同の伐採対象樹木現地観察会開催。

7月30日：7/17提出の要望書に対する当局からの回答書を「執行部との顔合わせおよび団体交渉」の後に受け取る ([http://ka-kumiai.jp/dl/negotiation/Request\\_stop\\_parking\(2019-1\)\\_02.pdf](http://ka-kumiai.jp/dl/negotiation/Request_stop_parking(2019-1)_02.pdf))。

8月5日：「(再提出) 稲盛記念館で営業するレストランのための駐車場設置の中止を求める要求書ならびに公開質問状」を学長あてに提出。

([http://ka-kumiai.jp/dl/negotiation/Request\\_stop\\_parking\(2019-2\)\\_01.pdf](http://ka-kumiai.jp/dl/negotiation/Request_stop_parking(2019-2)_01.pdf))

8月6日：法文学部・理学部有志教員による「法文学部周辺の樹木の保護を求める署名」活動開始。

8月9日：南日本新聞朝刊に「鹿大、大樹14本伐採へ」記事掲載。

8月9日：朝日新聞(鹿児島版)に「鹿大の大樹14本残して、- 郡元キャンパス教員ら署名活動 -」記事掲載。

8月9日：法文学部・理学部有志教員による「法文学部周辺の樹木の保護を求める署名」972筆を有志教員が財務担当理事に提出し、会談を行う。

8月9日：施設部から全学向けに「(郡元) 環境整備(樹木伐採) 工事(別添資料参照)」が配信される。

8月16日：施設部から全学向けに「(郡元) 環境整備(樹木伐採)のお知らせ(通知)」が配信される。

8月21日：南日本新聞南風録に本件コメント掲載される。

8月21日：施設部から全学向けに「(郡元) 環境整備(樹木伐採) 工事の中止のお知らせ」が配信される。

8月21日：「(再提出) 稲盛記念館で営業するレストランのための駐車場設置の中止を求める要求書ならびに公開質問状に対する回答」が組合に提示される。

([http://ka-kumiai.jp/dl/negotiation/Request\\_stop\\_parking\(2019-2\)\\_02.pdf](http://ka-kumiai.jp/dl/negotiation/Request_stop_parking(2019-2)_02.pdf))

8月22日：南日本新聞トップ記事で「鹿大、樹木伐採計画見直し」が報道される。

9月4日：初回の署名提出(8月9日)後に集まった341筆の署名が法文学部・理学部有志教員により財務担当理事に提出された。これにより最終的な署名総数は1313筆となった。

このように樹木伐採を中止させた反対運動の流れの特徴は、組合からの中止要請・伐採樹木観察会だけでなく、理学部・法文学部を中心とした有志教員による署名活動、新聞報道など複数の方面から中止の要望が出ていることである。ここに挙げた以外にも OB 会やその他いくつかの団体からも、大学当局へ要請があったようである。このように短期間に見直しを求める声が多方面から寄せられたことが、今回の伐採中止を実現させたことは間違いない。今後の教職員組合の運動において、このように多方面の個人や団体を巻き込んで、より大きな要請活動を展開することが大切であると感ぜられた。

その一方で、今回組合からの要望書の主要 3 項目のうち、樹木伐採中止以外の 2 点、すなわち 2) 新設される駐車場の特に出入り口における安全確保、および 3) これら駐車場整備計画を大学構成員に事前に丁寧に説明すること、については、未だ当局から納得できる回答が得られていない。たとえば、組合から 8 月 5 日付で提出した質問状で、私たちは「駐車場出入り口が設置される予定の高麗本通りや歩道側の安全問題について県警や専門家の意見を聞き公開すること」を求めているが、8 月 21 日付の当局からの回答([http://ka-kumiai.jp/dl/negotiation/Request\\_stop\\_parking\(2019-2\)\\_02.pdf](http://ka-kumiai.jp/dl/negotiation/Request_stop_parking(2019-2)_02.pdf))では「安全対策については、サイン等(サイン・看板・標識等)の充実、並びに行政機関(鹿児島市・鹿児島県警)と協議を行っているところであり、改めて、専門家の意見などを求め公開することは考えていません。」としており、大学構成員への公開を拒否し、安全性の確保は曖昧なままである。また、「法文学部教授会の資料などでは工事スケジュールや利用率、経済面や駐車場運用の際の通勤時間帯などの混雑時の安全性の確保などに関する資料が含まれていなかったようだが、学内関係諸部局の了承を得るのに、このような資料の公開は不要と考えているのか。」という組合からの質問に対しては「稲盛記念館の駐車場整備については、各学部から選出された教授又は准教授等で構成され、施設に関する事項の実施について審議する、施設マネジメント委員会での了承を得ており、改めて、学内関係諸部局への説明は考えていません。なお、本委員会において工事スケジュールおよび安全対策については説明済みです。」という回答のみであった。教職員の労働環境や学生の学習環境の悪化を招きかねない、キャンパスマスタープランの変更であるにもかかわらず、スピードのみを重視した学内政策の決定を推し進めようとするこのような態度は、今後も続けられる恐れがある。私たち組合はこのような配慮を欠いた性急な学内政策決定がされぬように今後も目を光らせ、教職員が働きやすく、学生が学習しやすい鹿児島大学を目指して活動していこうと考えている。(文責 書記長 坂巻祥孝)

### 全大協九州第 16 回教研交流集会ご報告

全大協九州第 16 回教研交流集会が 2019 年 9 月 7、8 日の 2 日間の日程で大分県別府市にて開催されました。鹿児島大学からは農学部の坂巻祥孝先生、水産学部の中村啓彦先生、そして筆者である理学部の中川の 3 名で参加してきました。会場となったのは別府市内の鉄輪温泉です。湯元旅館かなわ荘を貸切り会場として、約 60 名の参加者が沖縄県を含む九州各地から集まりました。今年度、初めて中央執行委員会のメンバーとなった筆者ですが、教研交流集会への参加も同じく初めてで、やや緊張気味に会場へと向かいました。

#### 【1 日目】

教研交流集会は隔年開催であり、今年のホストは大分大学の教職員組合でした。初日の 13 時、大分大学の市来龍大氏の司会で全体集会が始まりました。実行委員長の大分大学 石井まこと氏と全大協九州事務局長 角縁進氏からの挨拶の後、メインのプログラムが始まります。まず徳島大学における組合活動について徳島大学教職員組合書記長の山口裕之氏から報告がありました。山口氏は 2017 年に「大学改革という病」を著され、各地で講演をされるとのこと。とても熱のこもった語り口の山口氏は、組合や大学の在り方を歴史的にさかのぼり説き起こしてくださいました。ガバナンスの名のもとに、トップダウンによる強引な大学運営が目立つ昨今ですが、競争的資金獲得や人事に関する様々な問題点を指摘する中にも、山口氏の「研究者間の競争だけでは良い大学の実現にはつながらない」という考えが通底しているように思えました。話は国の行政にも及びます。地方大学の運営方針についての議論がなされる経済財政諮問会議において、本来高等教育を司るべきはずの文科省の存在感が低いとの話に、筆者は大変残念な思いを抱きました。明るい話と

して紹介したいのは、徳島大学で築かれている、組合に所属する教員と大学の事務職員との間にある信頼関係についてです。例えば、大学運営においては、ときに実施に際して大きなショックが予想されるような改革事案が沸き起こったりするものですが、そうした時に、前もって労使間の議論ができるような関係性が築かれているのだそうです。こうした関係性は相互の信頼の上に成り立つものであり、きっと長い時間をかけて構築されたものだと思います。筆者には大変理想的な関係性が見え、大変参考になるものでした。

その後も「大学の明日を考える」のテーマで、大分大学の方々により国立大の研究費の推移、大学と地域連携の実情、男女共同参画、防衛装備庁への申請など、様々な話題が提供されました。続いて「組合の明日を考える」のテーマで組合の役割、イメージ検証、組合組織の拡大について話題が提供されました。中でも若い教員による「組合」という言葉がまとうイメージについての調査報告がありましたが、古めかしく、かつ厳めしい言葉遣いが飛び交う組合活動に対して私自身が持っていたイメージとも重なる点があり、興味深く聞きました。いずれの話題でも参加者の質疑応答は活発で、中でも私たち鹿大からの3名の発言は多かったように思います。初日夜の懇親会で供された「卵の地獄蒸し」は宿の中庭で丸1日かけて殻ごと蒸されたものです。卵の白身の部分がすっかり茶色く色づいた、鉄輪ならではの味でした。およそ半分ほどの参加者が出そろった2次会は、フォークギターを弾きながらの歌も聞こえる賑わいでした。

### 【2日目】

2日目は鹿大からの3名はそろって教員分科会へ参加しました。主に大学教員の年俸制に関わる話題でした。年俸制導入の状況は大学により、また採用人事のタイミングによりいろいろなケースがあるようです。すでに2019年2月には文科省からガイドラインが示されているにも関わらず、鹿児島大学においてはいまだに周知や具体的な議論が聞こえてこない状況ですが、今後どのように進んでいくのか、組合としては注意を払っていく必要があると感じました。

### 【さいごに】

今回筆者は教職交流集会において九州各地の大学の方々とは情報交換する場を得たわけですが、同じ地方大学として、一見すると置かれた状況は大局的に似ているように感じましたが、やはり細部に立ち入って話を伺うと様々な違いが見えてくることも分かりました。また、各大学の組合の活動性にも差があるようでした。今回ホストであった大分大学の組合活動に関して最も印象的だったのは、たいへん若い方が多い点でした。

(おそらく20代の方もいらっしゃるのではないかと思います。)聞きますと、中でも経済学部の方々が組合において中心的な役割を果たされているとのことでした。鹿児島大学は2年後にはホストとして第17回教職交流集会を開催する予定です。これから2年後に向けての準備が始まります。以上、レポートでした。(文責 中川亜紀治 鹿児島大学理学部)



会場近くの公園。鉄輪ではいたる所に源泉の蒸気が見えます。



2日目の教員分科会の様子。

◆  
のつけから恐縮であるが、次回(再来年)の教職交流集会は鹿児島で開催しなければならない。その心構えを今から持とうといっても無理な話であるが、再来年、慌てないように記憶は残しておいた方がよいだろう。今回の大会では

っぱな冊子が配布されたので、事の次第に関する詳細な記録はそれに譲ることにして（というよりメモ書きが少なすぎて無理なので）、ここでは私の感じた雰囲気をお伝えしたいと思う。

2012年度に中央執行委員をしていたとき、福岡で開催された教研集会に参加して以来、2回目の参加である。前回参加したときの記憶はかなり薄れているが、第1日目の企画として、どなたか全大協の役員の方が、大学改革の動向のようなテーマで招待講演された記憶がある（かなり怪しい）。また、それとは別に、特別講演として、九大応用力学研究所の大屋教授（当時）が、レンズ風車の研究を紹介されたことを覚えている（こちらは確か）。当時の記憶は曖昧であるが、今回の教研集会は、それと比べるとずいぶん趣の違う印象を持った。

まず、第1日目に、全大協の役員等（おそらく定番であろう）招待講演がなかった。その代わり、特別報告として、徳島大学教職員組合の山口裕之書記長による「徳島大学教職員組合の取り組み」に関する話を聞いた。山口さんは、10年のあいだ書記長を務められ（今も継続）、その間に組合員を2倍に増やした実績の持ち主で、話自体がとても面白かった（後で振り返る）。さらに、時間を埋めるための特別講演ではなく、気合十分のシンポジウムが時間いっぱい開催された（後で振り返る）。主催者である大分大学教職員組合の若手教員7人が、次々と問題提起を行ったのには驚いた。大分大学教職員組合の活力をもって成し得たことであり、鹿児島大学教職員組合とは勢いの違いを実感した。このように、第1日目の企画は、大分大学教職員組合の実力と魅力が存分に発揮されたものであった。さて、2年後はどうでしょう。鹿児島大学のオリジナル企画をお届けできるかどうかは、再来年度の組合の活力によっている。再来年いきなり我々の内部エネルギーが高まることはなさそうなので、徐々に高めていく必要がありそうである。

第1日目の終わりの懇親会であるが、会場が貸し切りの温泉旅館ということもあり、密度の高い交流が為されたと思う。夕食を兼ねた懇親会では、大分大学のメンバーが御当地クイズを出して景品を競う余興があった。宮崎大学のメンバーは楽器を演奏し、鹿児島大学の我々もジャンケン大会の勝者に景品の焼酎（鹿児島大学ブランド）を振舞った。懇親会を盛り上げることは、やや活力の落ちた鹿児島大学教職員組合でも、問題なくできるであろう。しかし、会場となる場所の選択が難しい。アクセス重視で市内の会場を選ぶか、温泉旅館を求めて指宿、霧島まで出て行くか、迷うところである。今回の参加者（一部）からは、指宿に行きたいという声も聞かれたが、それに比べると準備が大変になり自らの首を絞めることにもなりかねない。ちなみに、私は市内派である。温泉でのおもてなしよりも、企画の充実に力を注がねばならない（はずである）。ただし、宿を借り切った密度の高い交流は捨てがたいものである。

第2日目は、6つの職種に分かれて職種別分科会が開催された。私は教員部会に参加したが、ここでも大分大学の石井さん（実行委員長）から、「人事給与マネジメントと学部自治」に関する問題整理と問題提起がされた。しっかりした準備があつて、はじめて意味のある議論が成り立つが、まさにその通りであったと思う。随所で為された徳島大学の山口さんのコメントも生きていた。6つの職種で分科会を開催し、かつ、それぞれに問題整理と問題提起をするレポーターを付けるのは、相当大変なことであろう。この点で、教研集会の成功はスタッフの人数に比例すると思われる。再来年度、教研集会実行委員会に多くの組合員が名を連ねることが期待される。ちなみに、大分大学からは名簿上27人の組合員が参加している（その他は32人なので、いかに多いかがわかる）。

最後に、今回の教研集会で私が注目した論点を、ご紹介しておきたい。第1日目の徳島大学の山口さんの話であるが、過度の競争は組織を破壊することを強調されていた。教育研究に何の情熱も注いでいない人は論外だが、業績評価は優劣が付きにくい形にしておいて、お互いの給与の差なども知らない方が、職場環境（人間関係）が良好に保てるので結果として組織の持続的発展が見込めるということだと理解した。第2日目の教員部会では、人事給与マネジメント（年俸制）の導入に対する課題として、この点が議論になった。他大学では、すでに今年度から、新規採用もしくは昇任人事で昇格した教員に対して、年俸制を適応しているところがある。鹿児島大学も、来年度からの導入に向けて急ピッチで制度を整えているようである。これに関して、組合の役割は大きいという認識を強く持った。最後に、大分大学の若手教員によるシンポジウムだが、「大学のあしたをかながえる」と「組合のあしたをかながえる」の2つのテーマが取り上げられた。ここでは、後者から一つ、組合の在り方に関する論点を紹介する。組合は強力な法的権利を持つので、そもそも存在することに意味があるということである。とにかく、大学経営陣は組合を無視することはできないので、うるさいくらいものが言えるのである。権利を行使するにはエネルギーが要るが、黙っていても宝のもち腐れになってし

もう。教授会が単なる承認機関に堕した今、組合は唯一の交渉機関なのだ。質問・要求、団体交渉など、直接の成果に繋がらない場合がほとんどだが、くぎを刺す役割は大きいと感じた。(文責 中村啓彦 鹿児島大学水産学部)



第1日目：徳島大学教職員組合の山口書記長の講演に対して、鹿大の坂巻書記長が質問しているところ（坂巻さんの前2人は、筆者と理学部の中川さん）。



第1日目：シンポジウム「組合のあしたをかんがえる」。大分大学の小山さんによる「国立大学の組合の役割とはなにか」の講演。



第1日目：夕食を食べながらの懇親会で、御当地クイズの余興をしているところ。ちなみに、筆者は、ほとんど勘で答えたが、8問中7問正解であった！（景品として、カボス醤油を頂いた。）



第2日目：職種別分科会「非常勤職員部会」。

令和元年度第2回団体交渉 要求事項募集中 / 10月11日までに中央執行委員又は組合事務局にご連絡ください。